

シノドスへの歩み みことばと共に 主の洗礼C年

小西広志

2022年1月9日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年01月09日、主の洗礼の主日です。今日の朗読の箇所をシノドスの教会のあり方と関連づけながら読んで、味わっていきましょう。

主は羊飼いと群れを養い

第一朗読の最後に次のようにあります。「主は羊飼いと群れを養い、御腕をもって集め 小羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる」（イザ40章9節）。聖書の中には数多くの羊飼についての描写があります。こういった聖書、つまり旧約聖書の伝統を受け継ぎながら、古代教会の人々は羊飼いと復活のキリストを重ねあわせて見ていました。この世での苦役を生きる古代教会の人々にとって、復活のキリストは尽きることのない青草の茂みへと導く牧者だったのです。

小羊をふところに抱く羊飼である主は、小羊を見つめます。小羊もまた羊飼いを一身に見つめます。小羊は羊飼いを見失うことはありません。羊飼いはまた小羊の必要なものを知っています。だからその母親もまた導いてくれます。羊飼いと小羊の間に交わされたまなざしのおかげで、両者は一つなのです。

御自分の憐れみによって

第二朗読は『テトスへの手紙』から読まれました。真ん中ぐらにある一節、「神は、わたしたちが行った義の業によってではなく、御自分の憐れみによって、わたしたちを救ってくださいました」（3章5節）は印象深い一文です。わたしたちの行いがわたしたちを救うではありません。ただ、神さまの憐れみと慈しみだけが、わたしたちを救うのです。この救いは水の中で洗われることを通じて、新たに生まれ変わる洗礼によって実現していきます。イエスさまが洗礼をお受けになられたのと同じように、わたしたちも洗礼を受けることによって、主イエス・キリストと深く結ばれて、キリストのように物事を見、キリストのように言葉を語り、キリストのように生きていくのです。

あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者

今日の福音朗読は少し不思議です。ヨルダン川でのイエスさまの洗礼の箇所ですが、洗礼の様子がどのようなであったかは記されていません。ですから洗礼者ヨハネも登場しません。むしろ、イエスさまが洗礼をお受けになった後に何が起こったかに焦点を当てています。

「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（3章22節）を記憶したいものです。天の御父が自ら、イエスさまがどなたであるかを示してください。イエスさまは天の御父から「愛された子」なのです。

ところで、愛は一方通行ではありません。双方向です。ですから、天の御父から「愛された」イエスさまは、当然、その愛を天の御父にお返します。つまり、天の御父を愛します。こうして、御父と御子であるイエスさまの間に愛が循環します。ですから、御父と御子は一つなのです。

「わたしの心に適う者」とは、天の御父のお心とイエスさまの心がピッタリと一致している様子を示す一文です。この箇所を原文に忠実に訳すと「わたしはあなたを喜んだ」とも訳せます。まさに、御父にとってイエスさまは喜びだったのです。心がピッタリと一つになっていたからです。

まとめ

今日の第一朗読で注目したいのは、先ほども申し上げましたように羊飼いと小羊がピッタリと一つになっている点です。羊飼いは小羊のところがよく分かる。小羊も羊飼いの慈しみのところを受け止める。このような関係が、福音朗読での「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」でハッキリと表されます。御父と御子は一つなのです。両者を結ぶのは愛です。第二朗読でパウロは洗礼の意義を伝えますが、洗礼によってわたしたちに豊かに注がれたのは聖霊、つまり愛の霊なのです。

現代の社会は自由に、すなわち自分の思うとおりにいろいろなものを選びとることができます。自由とは現代人に与えられた特権とも言えるでしょう。時には、自分の信仰も自分で選びとった考えがちです。そうしますと、洗礼の秘跡を受けることにあまり意味を見いださない人もいないわけではないようです。「わたしが信じているから、いいでしょ」という態度です。それはそれで悪くはないですが、第二朗読にあるように自分の業、つまり行いだけで救いを得られるのでしょうか。それほど、人間は素晴らしいのでしょうか。

ただ、神さまの憐れみに頼ってしか、救いを得られないのです。そして、洗礼の秘跡によっていただけるのは、罪のゆるしであり、神の子のいのちであり、聖霊の恵みです。聖霊の恵みとは愛の恵みです。人と人との関係を生きるときに、そこに愛がなければ虚しい関わりです。自分と自分との関係を生きるときに、そこに愛がなければ惨めでちっぽけな自分自身を受けとめることができません。

洗礼を受けるとは、神さまからの愛を生きることには他ならないのです。「あなたはわたしの心に適う者」という天の御父の言葉は、わたしたち一人ひとりが神さまにとっての喜びそのものであることを伝えてくれます。愛された者として生きる、いや、生きていこうとする人々の群れが教会なのです。

それでは、また来週。